

牧会

投稿論文

牧会における人間研究と現象学的アプローチ

岡村直
樹岡村直樹

I. 現象学的研究の方法と意味

A. フッサールの現象学

現象学とはオーストリアの哲学者、エトムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859年～1938年) によって提唱された哲学の一分野である¹。フッサールはそれまでの意識を自明視する実証主義的な認識論を、実在の予想に基づく態度であるとして嫌い、ありのままの「事象そのもの」を明らかにすることこそが大切であるとした²。そのこと

¹ ヘーゲルも「精神現象学」という著作を残しているがこれは彼が提唱した「意識」を問題とする哲学の分野で、意識そのものから理性に至る発展の過程について言及したものである。この著作は精神の弁証法的発展をその題材としており、フッサールの現象学とは大きく異なる。

² 認識は認識される客觀と、認識する主觀の対立の上に成り立つ。では認識はどのようにその対立を乗り越えて明証な直感と、確実な真理に達することができるだろうか。のために彼は、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げ「エポケー」(判断停止)とし、そのような信念、そして「ある」とされる世界がどのように成立し、経験からどのように構成されるのかを探求することが必要不可欠であるとしたのである。デカルトからヘーゲルに至るまでの近代哲学は、「世界は客觀的に存在する」という大前提の上に成り立っていたが、この大前提こそに問題がある

のためには「現象学的還元」という独自のアプローチを生み出した。これは日常生活における人間の意識が素朴に信じて疑わない世界の諸事物（事象に対する好き、嫌い、肯定、否定等の判断を含む）を「かっこ」に入れ、これに対して無関心で中立的な立場をとった後、まだそこに残るもの「純粹意識」とし、それを厳密な哲学の題材とする方法である。フッサールは現象学を当初、「無前提」で「純粹」な哲学の学びになりうると考えていたが、その後人間の意識を極端に抽象化することに限界を感じ、現象学の矛先を厳密な哲学から、具体的な「生活世界」へと方向転換させていった。現象学はその後、フッサーの後継者であったマルティン・ハイデッガーによって実存主義哲学へ、その道筋を大きく変えることになる³。

B. 現象学的方法とその応用

現象学は、哲学以外の様々な学問分野に対しても非常に大きな影響を与えており、特に現象学的還元という方法、つまり先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察することというアプローチ自体が、様々な形で応用されている。以下は現象学的方法が用いられている2分野の例である。

1) 現象学的心理療法

現象学は哲学の一分野として、心理学の基礎としての役割を果たしている。特にフレデリック・パールズのゲシュタルト・セラピーや、カール・ロジャースのクライエント中心療法等に影響を与えていたと考えられている。現象学的方法を用いた心理療法としては、現象学的心理療法をその例に挙げることが出来る。現象学的心理療法は、心理カウンセリングにおいて個々の経験や、表れてきた現象を描写し、その描写から、テーマを見出し、更にそのテーマを様々な観点から検討していく、自己内において、新しい意味付けを行う療法である。具体的には、カウンセラーがクライエントの話を、心を集中させて無心に聞き

とフッサールは感じたのである。

³ ハイデッガーは自然界の中で人間だけが観念の世界を持つことから、人間を「現存在」と位置付け、更に人間の死と死への自覚が生きることの意味であると考えた。

つつそれを直感的に描写するといった方法が用いられる⁴。

2) 宗教現象学

現象学的に宗教を研究することは、例えばジョン・ヒックの宗教多元主義に大きな影響を与えていた。ヒックは現象学に基づき、自然主義的に宗教を定義し、また様々な宗教形態に共通する内容を明確にしようと試みた⁵。宗教現象学は、更にフッサーの現象学的還元という方法を用いて宗教を研究する。フッサーの場合、現象学的還元に用いるエポケーとは、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げし、意識に現われたものを素直にあるがままに視る態度を指すが、宗教現象学においては、宗教の真理性や絶対性といった見方を「かっこ」に入れ、それから身を引き、中立的な立場、あるいは判断不可能な立場から宗教を研究するものである⁶。

C. 現象学的研究方法

現象学的心理療法や宗教現象学は、フッサーの哲学的世界観を心理学や宗教学のコンテキストにおいて受け入れ用いるが、現象学的研究方法は、現象学的還元の方法の部分、つまり「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」という部分を取り入れ、推論や試論からではなく、個々の現象に視点を移し、そこを出発点として行う研究の方法論である。

⁴ ムスタークル、クラーク・E. 「現象学的心理療法」（ミネルヴァ書房、1997年）

⁵ John Hick, *An Interpretation of Religion: Human Responses to the Transcendent.* (New Haven: Yale University Press, 1989), pp.1-3.

⁶ 「宗教現象学におけるエポケーとは、自分の信じている宗教の真理を絶対とする信憑性を括弧に入れることである。つまり宗教現象を独断的に価値判定しないということであるが、むしろ、どうにも価値判定しようもないものの前に立たされているといったほうが実際に近いかもしれない。エポケーは無前提の立場に立とうとすることではなく、判断が不可避的に関わる真理の問題から身を引いて、判断を中止するのである。あるいは既得の概念で判断しない、聞き手の立場になる、相手の身になる、などと言い換えてもよい。」堀越知巳「宗教現象学の方法」「早稻田商学」第305号（昭和59年6月30日）30頁

1) 質的研究の特徴

現象学的研究方法の代表的な研究方法のひとつに、質的研究を挙げることが出来る。質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてではなく、その質において理解し研究する事を指す。量的研究において研究の質は、数量的にサポートされた統計学的データに基づくものでなくてはならず、ある意味機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるものである。一方質的研究に関しては、以下のようなユニークな特徴を挙げることが出来る⁷。

- ・質的研究は仮説を立て、またその検証することを目的としない。
- ・質的研究は実験的研究状況を設定しない。
- ・質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。
- ・質的研究は研究過程での研究者の主觀を考慮しその内容を取り入れる
- ・質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
- ・質的研究は研究対象の一般性や普遍性より、具体性、個別性、多様性に即する分析を行う。
- ・質的研究は研究対象や、そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈の中で取り扱う。
- ・質的研究は質的データに基づいて分析、理論化を行い、現象に内在する意味を見出す。

質的研究は具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性の中で捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある⁸。さらにこの研究方法は、量的研究が取り扱いを躊躇する、人間の立ち振る舞い、感情の動き、直感、といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのである。

⁷ Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 2002).

⁸ ウヴェ・フリック『質的研究入門-人間の科学』のための方法論』(春秋社、2002年)、19頁

る。

2) 質的研究のプロセスとグラウンデッドセオリー

質的研究のアプローチを科学的な研究方法にまで押し上げた功績を持つのは、バーニー・グレイサーとアンセルム・ストラウスの2名である。彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られ、データ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されている⁹。例えばインタビューを中心に据えたデータ収集の場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者が出来る限り自由に語ることが出来るよう心がけつつ質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが必要とされる。またインタビューの内容そのもの以外にも、研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線、服装等までもがデータとして記録されることもある。研究対象者の数も、量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることが出来るかという点が重要なのである。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとまり）を生成し、それらを階層的に組織化していくことが必要である。例えばある社会現象を、質的データを通して分析しようとする場合、カテゴリー生成の枠組みには、2つの側面が存在する。その社会現象が生起する条件、要因、状況、現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と、その社会現象がどのような展開や、やり取りを経ているのかというプロセス的側面である¹⁰。またデータ分析のために必要なもう一つの手法にコーディングがある。コーディングとは、データ中の諸概念を識別し、特性を発見した上で構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にするためにコード（コードワード）を付ける作業である¹¹。

⁹ Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc., 1998), p.12.

¹⁰ Ibid., p.123, p.192.

¹¹ Ibid., p.153, p.179.

最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。質的に得られたデータを分析し、そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」（地面、地べた）から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

質的研究はともすると、単なる「インタビューの記録と、そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多いが、実際は非常に細かいデータ分析を必要とする研究方法である。しかし一方で量的研究のように、それはいわゆる科学的合理性に優れた研究方法ではなく、主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究であることも確かである。実際、質的研究の第一人者であるマイケル・クイン・パットンは、質的研究のデータ分析を「科学であり芸術ある」(the science and the art of analysis)と呼び、研究者の創造性を研究の重要な要素としている¹²。質的研究は近年、様々な研究分野において用いられる研究方法となっている。特に心理学、看護学、教育学、社会学、文化人類学等においては、ひとつの主流な研究方法として確立されつつある。

II. 現象学的研究方法と牧会における応用

A. 人間研究の必要性と聖書

前記されたように現象学は様々な研究分野の基礎となり、また多くの応用研究分野においても用いられている。では現象学的アプローチは、福音主義神学の範疇においても応用が可能であろうか。例えば宗教現象学では、宗教の真理性や絶対性に対する判断から身を引く事が宗教研究の前提であり出発点であるとする。もちろんそのような態度で神学にアプローチすることは、福音主義神学の精神に相反するものである。創造主である神の権威、聖書の無誤性等の教理を考慮せずして、教義を語ることは出来ないからである。では現象学は、福

¹² Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, pp.542-458.

音的な信仰を持つクリスチャンにとって、いかなる場合においても無益な思想なのであろうか。確かに現象学と福音主義神学は、その基本的な世界観や価値観において相容れない思想であると言うことはできる。しかし現象学そのものではなく、現象学的アプローチに関してはそうではない。繰り返しになるが、現象学的アプローチとは、「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」方法である。福音主義の立場から考えれば、このアプローチが前記の宗教現象学のように、「神の啓示の真理性や絶対性から身を引いた、中立的な立場からの聖書の学び」に用いられることには問題があるが、研究の対象が社会や人間である場合はどうであろうか。

聖書は人間という存在に関して様々な真理を語っている。人間は肉体と魂(靈)から成っており(1テサロニケ5:23、マタイ10:28、1コリント5:3,5)、罪を持ち(エペソ2:1、ローマ3:23)、その結果永遠の死に至る存在である(ローマ5:12)。しかし人間は仲保者として来て下さったキリストを通して救われる所以である(ピリピ2:6,7、ヨハネ3:16)。これらはすべて人間という存在の本質に関する教えである。人間が聖書を通して自らを、また他者を、その本質において知り理解することは必要不可欠な事である。しかし一方で、そのような本質(性質)を持つ人間が、個別の社会背景、時代背景、地域背景、文化背景の中でどのように生き、またどのように他者との関係を持つのかについて知ること、言い換えれば、人間の本質が、実社会でどのように表されるのかを知ることも必要な事では無いだろうか。

ルカはその記述の中で、アテネに住む人間の行動について語り¹³、パウロは彼らの宗教心について言及した¹⁴。更にパウロは魂の獲得のための、ユダヤ人、異邦人、「弱い人々」それぞれに対する深い理解に基づいた個別のアプローチについて語っている¹⁵。これらの記述は今日のクリスチャンに対して、様々な地域、

¹³ 使徒の働き17:21「アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。」

¹⁴ 使徒の働き17:22「『アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。』」

¹⁵ 1コリント9:19-22「……弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。」

文化、社会の背景の中で、人々が何を信じ、生き、行動するかについて知る必要性を説くものであると言えるのではないだろうか。

日本の福音派クリスチャンはパウロやルカのように、人間理解を深めようと努めているだろうか。またたとえそれを求めていたとしても、伝道対象である人間、そして彼らが構成する社会、彼らが培った文化についての理解を得る手段を持ち合わせているだろうか。聖書はどのようにパウロやルカが、アテネ人や異邦人についての深い理解を得るに至ったかについて言及していない。ただひとつ言えるのは、彼らは恐らく「アテネ人論」や「異邦人論」といった他者の著作からその知識を得たのではなく、聖霊の力に助けられつつ、自らが見聞きした知識の積み重ねによってそれを得たのであろうということである。

聖書の人間観に立脚し、聖霊の助けを仰いだ上で、私たちが更なる人間理解を深める手段には、様々な方法が考えられる。本やセミナー等を通して他者から学ぶのは最も手早い方法であろう。しかしそのような場合、その知識は非常に一般化された、広く浅いものであることが多い。社会の多元化、価値観の多様化が進む現代日本において、紋切り型の人間分析は果たして効果的であろうか。更に、人間理解の知識を他者に求める場合、その知識が聖書的な人間観に基づいていない場合も多い。福音的な出版社から出ている日本人論や文化論の著作はその数は圧倒的に少なく、仕方なくセキュラーなソースに依存してしまうことが多いであろう。

B. 福音主義神学と現象学的研究方法の利点

上記のような状況の中で、現象学的なアプローチ、特に質的研究方法は私たちクリスチャンにひとつの効果的な選択肢を与えるのではないかと考える。クリスチャンが質的研究方法を用いて人間理解を深めようとするとき、そこに少なくとも4つのメリットを見出すことができる。第一に、クリスチャン自らが研究者となるとき、他者、特にクリスチャンではない者の人間理解に頼る必要性が軽減する。もちろんクリスチャン以外の者による優れた人間理解の著作は多く存在し、またクリスチャンによる人間分析が常に正確であるとも限らないが、少なくとも福音的な神学に基づく人間理解のメリットは大きい。第二に、

クリスチヤン自らが研究者となるとき、対象範囲を絞った研究を行うことが可能となる。社会の多元化、価値観の多様化が進む現代日本において、従来のような紋切り型の大きなくくりで人間を理解しようとするのではなく、自らの置かれた特有の地域、環境、文化における人間理解が可能となるのである。第三に質的研究は、量的に表すことの難しい人間感情、心の動き、対人関係といった分野において有効である。質的研究が量的研究と大きく異なる点は、上記したようにデータを数量化する必要が無い点である。例えば「寂しさ」の感情を量的研究が取り扱おうとするとき、「何回寂しいと思ったか。」「以前よりその回数は増えたか減ったか。」「研究対象者の何割が寂しいと感じたか。」といった種類の質問が必然的に研究の中心となり、そこには厳密な構造が要求される。対照的に質的研究では、研究対象者の言葉を質問で遮ることなく、感じたままに語られた言葉や語調、さらに仕草までが研究データとして加味され分析されるのである。パットンは質的研究を「科学であり芸術である」と著作の中で述べたことを前記したが、福音的な組織神学者のミラード・エリクソンも、キリスト教神学の中で、「神学は学であると同時に、ある種の芸術でもあるため、厳密な構造に従わせることはできない。」と述べていることは興味深い¹⁶。第四に、クリスチヤン自らが研究者となって人間理解を深めようとするとき、研究の過程を聖霊の助けを仰ぎながら進めることが出来るというメリットが生まれる。質的研究は研究過程での研究者の主觀を考慮しその内容を取り入れることが出来るからである。人間のすべての営みを導いて下さる生きた神の導きを、人間理解のための研究においても期待できるのである。

C. 牧会における応用

質的研究（今まで現象学的研究方法という名称を用いてきたが、以下からは質的研究という名称を用いる）を用いることが可能な現場は様々あるだろうが、ここでは牧会に焦点を当てて考える事とする。牧会の中心に位置するのは、何と言っても聖書の言葉の取り次ぎと祈りであるが、実際に大きな壁となって

¹⁶ ミラード・J・エリクソン「キリスト教神学・第1巻」（宇田進監修、いのちのことば社、2003年）70頁

牧会者に立ちはだかる問題は、人間性や人間関係から派生している場合が多いのではないだろうか¹⁷。聖書の学びを深め、伝道活動を推進し、教会奉仕に取り組もうとする時、会衆が何を感じ、何を考え、どのように成長し、またそこにどのようなダイナミックス（関係性、関連性、力関係）が働いているかを無視することは出来ない。パウロがそうであったように、祈り、聖霊の助けを求めて、牧会対象者の状態に敏感になり、知恵を用いて彼らの様々な必要に取り組むことが牧会のひとつの大きな使命であると言える¹⁸。東京基督教大学において長年に渡り福音主義の立場から牧会学を教えた岡村又男牧師は、牧会に関する著作の中で、五つ列記された牧師の大切なつとめの第一番目に、教会の群れに「気をくばること」、すなわち教会員「ひとりひとりを個別に知ること」を挙げている¹⁹。またチャールズ・スポルジョンは、「会衆が陥る可能性のある悪を戒めること」を、牧会者の大切な務めのひとつとして挙げているが、会衆が陥る可能性のある悪を知るには、やはり会衆を良く知ることが必要となる²⁰。

牧会の現場において会衆について深く知りたいと感じる理由は様々であろう。会衆の聖書知識の度合いを調べたいのであれば、簡単な筆記試験を実施すればよいが、例えば聖書の学びと実生活における信仰の成長の関係性について知りたい場合、筆記試験でそれを知ることは困難である。聖書から信仰の一貫を説く前に、会衆同士の人間関係のダイナミックスを知ることも有意義であるし、また地域の福音伝道を考えるときに、伝道対象の宗教性について考慮することも大切であろう。ではここで具体的に牧会の現場において質的研究を用いるプロセスについて考えることとする。

1) 研究者の選択

牧会の現場において質的研究に取り組む場合、まず研究を実施する者を誰にするかという問題に直面する。牧師自身が研究を実行することのメリットは大

¹⁷ 岡村又男「主に喜ばれる教会生活」（いのちのことば社、1985年）75–77頁

¹⁸ エペソ 4:11–13、コロサイ 3:16

¹⁹ 岡村又男「教会役員・リーダーの役割」（いのちのことば社、1987年）74–75頁

²⁰ C.H. スポルジョン「牧会入門」（いのちのことば社、1995年）381–382頁

きい。牧師が教会員に声をかけ、個人的に話しを聞くことは牧会においてごく自然なことであるし、教会で牧師に声をかけられ、説教をされるのではなく、じっくりと話しを聞いてもらえる場面が作られるならば、それだけでいくつかの問題の解決につながるかもしれない。しかし研究者が牧師であるがゆえのデメリットも存在する。インタビューを受ける者が自らの牧師の前で萎縮し、気を使って本音を語らない場面を容易に想像することが出来るからである。更にもし教会員が牧師のありかたそのものに問題を見出しているとするならば、牧師自身がインタビューを行うことは、研究の障害に直結する可能性もある。牧師以外の者に協力を仰ぐ場合、牧師が信頼する教会員をトレーニングし、彼、又は彼女に全研究を、またはインタビューの部分だけを託すという選択肢もある。更に全くの部外者を教会に招き、質的研究を託すことも可能である。いずれの場合も取り組もうとする課題に合わせた判断が必要であろう。

2) 研究内容の選択と質問の作成

ここで「牧会現場での研究」という言葉を用いると非常にアカデミックなものに感じられてしまうが、言いかえればそれは例えば、「牧会における様々な場面で牧師や教会が直面する問題に焦点を当て、その原因や解決案策について考慮する。」といった非常に牧会と密接な関わり合いを持つ学びを指している。また問題に対する解決策を探るという方向性以外にも、例えば聖書の基準に照らし合わせて非常に成功していると思われる牧会の、その成功理由を探ろうとしても研究の対象となりうる。質的研究の大前提は、推論から答えを導き出すのではなく、焦点を当てている現象に対する先入観や推測を出来る限り控えつつ、そこから直接学び取り組むことであり、したがって研究内容の選択は、なるべく広く設定する事が大切である。研究が開始当初には想像すら出来なかった結果に至ることは、質的研究では頻繁に起こることだからである。

またデータの収集方法としてインタビューを取り入れる場合、オープンエン

デッド・クエスチョンと呼ばれる質問形態が用いる事が多い²¹。質問をオープンに設定すること、つまり質問によって答えが制限されたり、誘導されたりすること避けるために、「はい・いいえ」で答えることの出来る質問ではなく、「どう感じましたか。」「その時の思ったことを自由に述べて下さい。」といった質問を作成し、自由に語ることが出来るよう心がけるのである。インタビュー以外のデータ収集に、グループディスカッションの記録と観察や、自由作文等を用いることも可能である。

3) インタビューの方法とデータの収集

取り組む課題の内容によっても異なるが、一般的に質的研究では少なくとも2回以上のインタビューが実施されることが望ましい。2回目以降のインタビューの質問は、あらかじめ決められたものを用いても良いが、1回目のインタビューの結果を受け、その内容を変化させつつ、柔軟に対応することも重要である。またインタビューの時間は、相手が疲れてしまわない程度に設定し、1度目と2度目の間に十分な準備の時間を確保することも大切である²²。インタビューには時間がかかり、負担も大きいことから、協力者を募ること自体がチャレンジとなる場合もある。あらかじめインタビューしたい人数の数倍の人数に声をかけ、その中から無理なく参加できる人に対してインタビューを実施することが望ましい。また研究対象が教会全体の場合は、なるべく年齢や性別を偏らせない方が良いが、それは必ずしも必要不可欠な研究条件ではない。インタビューの場合、もし対象者が同意すれば、ビデオテープ録画をするのは効果的だが、カメラの存在で萎縮する場合も考えられる。なるべくリラックスできる場所を提供しつつも、研究者は語る者の言葉そのものだけにではなく、その口調、表情、抑揚、体の動きなども注意して観察し、記録することが大切である²³。

²¹ Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, pp.344-348.

²² Ibid., pp.383-384.

²³ Ibid., pp.290-291.

4) データの分析と結論

前記したように質的研究のデータ分析は、インタビューや、その他の観察を通して集められたデータをカテゴリー化し、またコーディングというテクニックを用いながら徐々に進めていく。そしてそこから浮かび上がる様々な特徴や特異点に目を向け、さらに同分野の研究なども参考にしながら結論付けに近づくのである。質的研究、特にグラウンデッドセオリーでは「トライアンギュレーション」(三角性、三角化) という言葉が頻繁に用いられる。データの収集に関するトライアンギュレーションは、データ収集を三つ、又はそれ以上の多様なソースから行うことや、複数の異なる方法を使ってすることを意味する²⁴。データ分析におけるトライアンギュレーションは、データの分析を他の質的研究のデータや、他分野の論文等を参考にして行うことを指す²⁵。研究者が福音的な信仰を持つクリスチヤンである場合は、聖書や神学書からの引用を付け加えるべきであろう。牧会というコンテキストにおいて質的研究が実施される場合、それが教会内や教団内の発表であり、いわゆる学術論文として書かれていない場合は、分析時に用いるトライアンギュレーションの割合をそれほど高くする必要は無いかもしれない。

5) その他の利点と注意点

質的研究方法を用いて牧会に関する研究を行う場合、その成果となるのが研究データの分析から導き出された様々な結論であることは言うまでもないが、実は研究プロセスの中にも利点が存在する。下記のケーススタディー#2においても取り扱われるが、研究対象者がインタビューを受けている間、またその後、口述するために考えるプロセスの中で、自らの感情や思いが整理され、それが新たな自己発見につながることが頻繁に起こるのである。実際この自己学習は、現象学的教育方法と呼ばれ、特に宗教教育の分野において効果的な教育方法のひとつとして数えられている²⁶。

²⁴ Ibid., pp.556-562.

²⁵ Ibid., pp.562-564.

²⁶ Mary Elizabeth Moore, *Teaching from the Heart: Theology and Educational Method*.

さて、牧会というコンテキストにおける質的研究の流れを簡単に説明したが、実際にこの研究方法を用いるには、更なる専門的なアドバイス（例えば少なくとも2時間程度の質的研究方法セミナーでの学び等）が必要になると思われる²⁷。またこの研究方法を用いる者に、多少の向き不向きがあることも想像できる。研究担当者は、研究対象者の心を開き、そこから様々なデータを引き出すことが求められる。対人関係におけるラポール形成も、研究の重要な要素のひとつであり、更に人間に対する観察力や、直感的なデータ分析力も問われるからである²⁸。また牧会の現場で質的研究がなされる場合、非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われるため、研究の結果を直ちに広く一般化することが出来るとは考えにくい。さらに時の流れと共に、人間も社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々であろう。確かに研究結果が応用される範囲は広くはないかもしれないが、福音主義の立場から、同様の研究が積み重ねられ、さらに様々な研究がそこを出発点として始まるこに重要な意義があると考える。

ではここで過去に筆者が実施した、クリスチヤンを対象とした質的研究の実例に目を向けることとする。

III. ケース・スタディー1 「米国の日系人教会の高齢者クリスチヤンの靈性」

A. 研究の背景

米国カリフォルニア州において筆者が牧会に携わっていた日系人教会では、毎週水曜日の午前中に「シニアミニストリー」という集会がもたれており、80

(Harrisburg, Pennsylvania: Trinity Press International, 1998), pp.93-98.

²⁷ 学術論文として執筆する場合には、専門家の指導のもとに研究を進めることが必要であろう。

²⁸ ラポールとは、心が通い合った関係、親密な信頼関係を表す言葉で、主に臨床心理学の分野で用いられる言葉である。パットンはラポール形成を質的研究におけるひとつの大切な要素として語っている。Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, pp.365-366.

人前後の高齢者（70代、80代の女性が大多数を占める）クリスチャンが集まっていた。1941年、日本軍の真珠湾襲撃によって戦争の火蓋が切って落とされた直後から、米国西海岸に住む多くの日系人は敵視され、様々な差別や迫害を受けた。戦いが続く中で米国軍部も、数十万人もの日系人の存在に危機感を抱き、1942年のルーズベルト大統領令に基づいた大規模な強制移住を行うことにした。西海岸に住む日系人はその多くが米国の市民権を有していたにもかかわらず、商売や家財道具を二束三文で売り払うことを余儀なくされ、着の身着のままで、主に砂漠地帯や荒野に設営された粗末な収容所へと向かったのである²⁹。この教会のシニアミニストリーの出席者の大多数は日系2世で、第二次大戦中の収容所生活とその前後の日系人排斥運動を体験していた。筆者はこの集会に定期的に出席する中で、まず彼らの明るさ、人柄の良さ、謙遜さに目を奪われた。もし自分が収容所生活や長期にわたる人種差別を体験していたら、もっと苦々しい感情で心が満たされるのではないかという思いから、彼らに学びたいと感じ、グラウンドセオリーを用いた質的研究を実施することにしたのである。

B. 研究の経緯と結果分析

研究開始の時点で筆者は既に2年以上もこの集会に定期的に出席し、筆者の目からは良好と思われる人間関係を彼らとの間に築いており、研究参加者（複数回のインタビューを受けてもらう）を募ることはさほど難しくないであろうと思っていた。しかし研究は予想に反し、開始時点から思わぬ苦戦を強いられた。ほとんどの高齢者は自らの過去、特に個人的な人生体験を語ることに後ろ向きで、「私の話しあつまらないですよ。」「〇〇さんの方が興味深い話を持っていますよ。」などと言っては、非常に消極的な態度を見せた。現役引退後何年も経つ彼らは仕事で忙しいわけでもなく、孫ほどに年齢の離れた筆者に対して「思い出話し」を自由に語るという、一見簡単そうなことを拒んだのである。

²⁹ Mitchell T. Maki, Harry H. L. Kitano, and S. Megan Berthold, *Achieving the Impossible Dream: How Japanese Americans Obtained Redress* (Urbana: University of Chicago Press, 1999), 30.

実際、教会に集う彼らの子どもや孫達も、祖父母の人生体験をあまり聞いていないと後日証言している。シニアミニストリーでの明るい友好的な人柄とは対照的なこの態度に筆者は更に興味をかき立てられ、個別に頼み込んで、第二次世界大戦中に収容所生活を体験し、少なくとも30年以上はクリスチャン生活を続けている10人の高齢者から話を聞くことに成功した。むろん個人差はあったが、以下は、オープンエンデッド・クエスチョンを用い、出来る限り自由な発言を促したインタビューと、彼らの行動観察から得たデータから、カテゴリー化やコーディングのプロセス等を経て見出された共通点である。

- 1) 彼らは自らの人生体験についてのインタビューを受けることに、非常に違和感を感じているようであった。
- 2) 彼らは自らのインタビューの内容が筆者の研究に役立たないのではないかと危惧する言動を繰り返した。
- 3) 彼らは自らの体験した収容所生活や日系人排斥運動に関して、ほとんどネガティブな感情を出さず、どちらかというと第三者的に淡淡と語り、「がまん」「しょうがない」という言葉を多くもちいた。(インタビューのやりとりは英語であったが、これらの言葉に関しては日本語を用いた。)
- 4) 彼らは「収容所生活は大変でしたか。」という問い合わせに対して、「いいえ」又は「そうでもなかった」と答えた。
- 5) 彼らは米国政府や日本政府に恨みを抱いていないと語り、良い市民になることを心がけていると強調した。
- 6) 彼らは高齢化による現在の自らの健康状態の悪化や、配偶者や友人の死に関して、上記同様「がまん」「しょうがない」という言葉を多く用いた。
- 7) 彼らは自らの信仰生活に関して、教会や牧師に従順であることを大切にしていると語り、神への服従を強調した。しかし一方で、聖書の自主的な学びには消極的な姿勢を見せた。
- 8) 彼らは友人を教会に誘うが、福音を語る、救いの証しを語るといった個人伝道には消極的であった。
- 9) 彼らは自らが率先してリーダーシップをとることに消極的であった。

筆者は当初、シニアミニストリー出席者の明るさや、友好的で謙遜な態度に感心したが、実はその背景にネガティブな感情を出すことや自己主張の躊躇、また自己に対する自信の無さがあるのではないかと強く感じるようになった。日系人は第二次世界大戦後の米国史において「モデル・シティズン（模範的市民）」、「サイレント・マイノリティー（自己主張しない少数派）」³⁰などと紹介されることが多いが、確かに外からはそう見えたことだろう。更にこのインタビューの結果を通して気が付いたことがあった。それは 1986 年に書かれた心理学の著作「Women's Ways of Knowing（女性の認識）」に紹介されている、社会差別や、ドメスティック・バイオレンス（DV・夫による暴力）によって傷ついた女性の性質と、このインタビューの対象者の性質が酷似している点である³¹。上記の研究では、度重なる差別や暴力によって女性は自己保身のために自己主張をしなくなり、また社会や夫に象徴される権威に対して盲目的に従順となる傾向があると報告されている。シニアミニストリーの高齢者も、戦前から続いている日系人排斥運動や、戦時中の収容所生活、更に戦後も長く続いた日系人差別を経験し、自己保身のために身の上に起る様々な苦難を「しょうがない」事として「がまん」することを覚え、国に対して、更には教会や牧師に対しても従順になることが得策として信仰生活を送ってきたのではないだろうかと信じるに至った。もしそうであったならば、インタビューによってあきらかになったこのグループの高齢者の言動の説明がつくからである³²。

³⁰ Sharon M. Fujii, "Older Asian Americans: Victims of multiple jeopardy," *Civil Rights Digest* 9:22-9 (fall 1976): 22-29.

³¹ Mary Field Belenkey, Blythe McVicker Clinchy, Nancy Rule Goldberger, and Jill Mattuck Tarule. *Women's Ways of Knowing*. (New York: BasicBooks, 1997), 6-7.

³² 多くの日系二世は移民前の日本文化の影響により「遠慮」や「謙遜」といった気質を持ち、それらがインタビュー等に影響を及ぼしたであろうことは十分考えられる。しかし一方で第二次世界大戦中に収容所には送られず、比較的の差別の度合いが低かったハワイの日系移民は、同じ日本人の伝統の背景を持ちながらも、本土の日系移民とは違う非常に開放的な気質を持っていることが報告されている。そのことからも本研究に加わった日系人が自らを語ろうとしなかった理由が、彼らの持つ日本人の気質のみによるとは考えにくく、やはり米国本土における差別の影響が大き

C. 研究結果と牧会的配慮の必要性

シニアミニストリーに属する日系人高齢者クリスチャンは、教会においてのいわゆる「トラブルメーカー」ではなかった。彼らは明るく、礼拝をはじめとする教会の様々な集会に出席し、教会内外における人間関係も良好であり、更に献金に対しても熱心であったからである。しかし聖書の自主的な学びや個人伝道には消極的であるという一面も持っていた。一見模範的な市民、そして模範的なクリスチャンに見えた彼らの従順さが、長年にわたる差別や迫害を原因とする自己卑下、自己保身によるものであるとすれば、教会において彼らに対する牧会的配慮がなされる必要が出てくるのではないだろうかと筆者は強く感じた。心の深いところにある傷を取り扱う必要性もさることながら、自己卑下はクリスチャンの使命である証しと、伝道に対する情熱を奪い、また権威に対する盲目的な従順は、自主的に聖書を調べ学ぶ姿勢³³からクリスチャンを遠ざけ、更には間違った権威、例えは聖書的ではない教えやリーダー等を見分ける判断能力³⁴に悪影響を与えるからである。また聖書的なセルフ・アイデンティティの確立、つまりキリストによる十字架の贖いに代表される神の愛を理解し、「わたしの目には、あなたは高価で尊い」³⁵ という言葉を日々感じながら生きることは、クリスチャン生活の喜びの源である。この最も基本的な神の言葉を実感することが無かつたとしたら、それはひとつの非常に大切な靈性の要素を欠いた信仰生活と言えるかもしれない。

この研究の結果は、シニアミニストリーに集まる多くの高齢者の靈性を吟

かたのであろうと筆者は確信している。(参考: フィールドワークとしてのライフヒストリー研究の展開と課題—カウアイ島(ハワイ) 日系人のライフヒストリー調査プロジェクトを事例として—『JOURNAL OF POLICY STUDIES』総合政策研究 NO.13 : 2002年9月、pp.67-90.)

³³ 使徒の働き 17 章 11 節 b 「非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」

³⁴ ピリピ書 3 章 2 節 a 「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。」

³⁵ イザヤ書 43 章 4 節 a 「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

味するひとつの手段として教会の牧師とシニアグループの責任者に報告され、以降ミニストリーの参考とされた。具体的には、礼拝メッセージや、特にシニアミニストリートでの学びの際に神の恵みや受容の教えが強調され、また聖書の学びに自主的に取り組む姿勢の重要性が語られた。更にはシニアミニストリーにおいて、まず似た境遇を共有する者同士が練習の意味も込めて互いの経験談や信仰の体験談を語り合い、その上で更に家族や友人にも自らの信仰の証をするという段階的アプローチが勧められた。

IV. ケース・スタディー2「米国のキリスト教系大学の日本人留学生と伝道」

A. 研究の背景

米国カリフォルニア州において筆者が教鞭を執っていたミッション系の大学には、毎年平均して約 40 人の日本人留学生が在籍していた。大学キャンパスでは、フライデーナイト・フェロシップという日本人学生を対象にしたクリスチヤン学生主催のミニストリーが毎週金曜日の夜に持たれており、多くの日本人留学生が集っていた。一握りのミッション系学校の卒業生を除き、彼らの多くは渡米するまでキリスト教との関わりをほとんど持たない学生であった。しかし大学在学中にこれらの学生の約半数近くが毎年、フライデーナイト・フェロシップ等のミニストリーを通してクリスチヤンになった。この驚くべき数字を目の当たりにして、この大学でクリスチヤンになる学生が、どこで誰からどのような影響を受け、どのような過程を経てそうなったか、またこの結果を他のコンテキスト（米国の他大学や日本）において再現することが可能かといった疑問に答えるべく、グラウンデッドセオリーを用いた質的研究を実施した。

B. 研究の経緯と結果分析

質的研究に取り組むために、まずキャンパスにおける日本人学生の行動の観察を行った。更に 20 人程の日本人学生に研究参加を打診し、日本においてはキリスト教との関わりがほとんど無かったが、米国に来てからキリスト教に興味を持った、又は見方が変わったという 10 名の学生（18 歳から 21 歳）に対する

るインタビューを実施した。インタビューでは上記の研究同様、オープンエンデッド・クエスチョンを用い、出来る限り自由な発言を促した。以下は出来る限り自由な発言を促したインタビューと、彼らの行動観察から得たデータから、カテゴリー化やコーディングのプロセス等を経て見出された共通点である。

- 1) 渡米以前はキリスト教を含め、宗教全体に対して漠然とした不信感を持っていた。宗教は怖い、深入りしてはいけないと思っていた。
- 2) 渡米以前は米国に対し、ポジティブなイメージを持っていた。特に自由の国という印象が強かった。
- 3) 渡米直後の生活には楽しさもあったが、様々な困難も伴った。特に家族や友人と離れての生活は、精神的に辛かった。
- 4) 米国生活で大きな戸惑いを感じたのは、言語や文化の違いから派生する様々なチャレンジもさることながら、交通手段の不便さから派生する行動範囲の限定という不自由さであった。
- 5) 米国の治安問題、人種差別問題を目の当たりにして米国社会に多少幻滅した。
- 6) 留学は今まで考えもしなかった文化や、社会について深く考えるチャンスをくれた。
- 7) 米国で出会ったクリスチヤンからは一様に好印象を受けた。特にホームステイ先であったクリスチヤンの家族との交わりは非常に楽しかった。
- 8) フライデーナイト・フェロシップで出会った日本人学生の印象も非常に良かった。フライデーナイト・フェロシップは、忙しい留学生活の中でオアシス的存在であった。
- 9) 以前は宗教に対して漠然と不信感を抱いていたが、米国でのクリスチヤンとの出会いを通してその不信感は減少し、キリスト教に対して好感、そして興味を持つようになった。

自らも米国への留学経験を持つ筆者にとって、研究対象の学生によって言い表された留学生活の困難さは容易に理解できるものであった。また日本におい

て抱いていた米国を持つ「自由」や「解放」といったイメージに対する憧れが裏切られるという感覚にもある程度共感することができた。宗教心理学者 Lewis R. Rambo の著書 「Theory of Religious Conversion：改心の理論（1999）」には、宗教的改心は個々の世界観が大きく振り動かされる時に起こることが多いと述べられているが³⁶、研究に参加した日本人学生の多くも、留学という体験を通して、自分の中にあった漠然とした世界観、宗教観を見つめ直す良い機会が与えられたと語った。では Lewis R. Rambo が語るところの、この「改心の土壤」が形成されつつあったその時期に、キリスト教はどのように彼らに働いたのであろうか。

研究が実施された大学は保守的なミッション系の大学で、学生にはチャペル出席が義務付けられており、入学当初から少なくとも週3回は、賛美歌やゴスペルソングを歌うことや、聖書の福音的なメッセージを聞く機会が彼らには与えられていた。しかしチャペルで語られたメッセージの内容や賛美等を通してキリスト教に興味を持ち、また以前持っていたイメージが変えられていったと語った学生は 10 人中 1 人もいなかった。一方で、クリスチヤンホームでのホームステイやキャンパスのフライデーナイト・フェロシップを通してのクリスチヤンとの出会いが、キリスト教を見直すきっかけとなつたと答えたのはなんと 10 人全員であった。更に彼らは、ホームステイ先やフライデーナイト・フェロシップで出会ったクリスチヤンのどのような点をポジティブなものとして感じたかという質問に対して、「フレンドリーさ」「親切さ」「自由さ」という言葉を回答に多く用いた。特に印象に残ったのは、「ホームステイ先で教会出席を決して強要されなかつたこと。」「フライデーナイト・フェロシップに行つたら、本当に歓迎されたこと。」「しつこく信仰のことを質問されたりせず、食事だけしてすぐ帰つても嫌な顔ひとつされなかつたこと。」といったコメントであった。

³⁶ 実際、大学へ入学したての新入生は、様々な宗教団体にとって格好のターゲットになっているともランボーは述べている。Lewis R. Rambo and Charles E. Farhadian, "Converting: Stages of Religious Change", *Religious Conversion*. eds. Christopher Lamb & M. Darrol Bryant. (London: Cassell, 1999. p.26.

これらのコメントを聞きながら、すぐに筆者の頭に思い浮かんだ聖書の言葉があった。それは「また、だれをもそしらず、争わず、柔軟で、すべての人に優しい態度を示す者となせなさい。」というテトスの一節である³⁷。日本人留学生にとって非常にわかりやすい形で実践されたこの聖書の言葉が、彼らに感動をもたらし、救いという聖霊の実へとつながつたのではないかというのが、筆者の受けた正直な印象であった。

C. 研究結果をふまえた米国における日本人留学生伝道の方向性

米国カリフォルニア州に位置するこの大学に留学する日本人学生の多くがクリスチヤンになったという出来事は、この研究を通してどのように説明することができ、またそれを今後の青年伝道の参考とすることができるだろうか。彼らにとって米国留学は、自らが置かれている状況についての熟考が促される機会を提供し、またそれが世界観、また宗教観の再考へとつながる体験となつた。外国生活で様々なチャレンジを体験する中で、個々が出会つたクリスチヤンの姿、つまり彼らにわかりやすい形で実践されたクリスチヤンの愛、柔軟、寛容の態度に魅力を感じ、それが引き金となってある者は毎週キリスト教会の礼拝に出席するようになり、またある者はさらに導かれてキリストへの信仰を告白するに至つたのである。

繰り返しになるが、質的研究の弱さは、比較的狭い範囲で起こっていることがその研究の対象になつてゐるという事実、すなわちコンテキストが非常に限定期であるという点にある。米国カリフォルニア州のこの大学の日本人留学生伝道に対してポジティブに作用した事柄が、そのまま他の場所で同じように作用するとは限らないのである。しかしながらといって、他の場所で同じことを試すことは無意味であるということにもならない。またもしこの学校で多くのクリスチヤンによって用いられたアプローチが、聖書的な教えに基づくものであるならば、この質的研究の結果に基づいてそれを実行するのではなく、聖書の権威に基づいてそれを実行することが勧められるべきであろう。

³⁷ テトス 3:2

例えば外国のクリスチヤン大学や教会と連携して、クリスチヤンとの出会いをひとつの大きな目的に据えた、留学伝道のような働きも考えられるかもしれない。更には日本の教会での青年伝道にあっても、世界観の再吟味を促すチャンスを与えるプログラム（国内における異文化体験等）を作り、また愛、柔軟、寛容を強調するというアプローチをそのミニストリーに盛り込むといった手法を考えることが出来るかもしれない。

またこの研究ではインタビューの終わりに、学生から興味深い感想を聞くことができた。それは彼らが筆者からの質問に答えようと思案するプロセスの中で、自らの感情や思いが整理され、それが新たな自己発見につながったと語った事実である。前章でも記したように、質問に対する回答を考えるプロセスそのものに学習的效果があるこの方法は、現象学的教育方法と呼ばれ、効果的な教育方法のひとつとして数えられている。それまで深く自らの信仰や世界観について考慮する機会が無かった青年に対して、この研究でされたと同様なインタビューを実行したこと自体も、ポジティブな結果につながったと考えられるのである。

V. 質的研究と今後の展望

最後にもう一度確認しなければならないことがある。福音主義の立場は、魂の救いや、信仰の成長を、聖靈なる神の成せる業であるとする。したがって聖靈なる神の働きを無視したり過小評価したりすることは当然避けられなければならない。また改心のメカニズムを人間の視点からのみ解明しようとし、聖靈なる神の働きを抜きにして同じような結果を再現しようとするような試みも福音主義の観点とは相容れないものある。しかし一方で「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」³⁸。というキリストの大宣教命令に従うクリスチヤンが、様々なコンテキストにおいて人間がどのように神の救いに至り、また成長するかという経緯を観察し学ぶことは、キリスト教の

宣教の歴史の中で繰り返されてきたことでもある。牧会において応用される現象学的研究方法、特にグラウンデッドセオリーは、人間が頭で作り出した推論や理論ではなく、また過度に一般化された人間論や文化論でもなく、神が創造され支配されているこの世の中で実際に起こっている現象を観察、分析し、そこから沸き上がるパターンや規則性に、問題解決の糸口を見出そうとする試みなのである。

（東京基督教大学准教授、日本同盟基督教団神学教師）

³⁸ マタイ 28：29a